

## 離党後の田中英光

——神山裕一宛書簡と「お洒落狂女」自筆原稿をめぐって——

田 中 励 儀

二〇一三年一月に生誕百年を迎えた田中英光は、「オリムポスの果実」(昭15・9)から自殺(昭24・11・3)まで、およそ九年間の短い作家生活の中で、振幅の大きい生き方をするとともに、傾向

の異なる多彩な作品を残した。その生涯は、ポート時代・左翼運動時代・戦争時代・党活動時代・デカダン時代、の五つの時代に分けて整理できる。その作品は、ポート時代に取材した「オリムポスの果実」や「端艇漕手」(昭19・2)などの青春小説群、中国の書物を題材とした「我が西遊記」(昭19・6、10)「わが水滸伝」(昭23・3)や、日本の歴史・伝説に基づいた「桜田門外」(昭20・9)「ぶらり火」(昭23・10)をはじめとする歴史小説群、自身の従軍体験を活かした「鈴の音」(昭16・5)「戦場で聖歌を聞いた」(昭

21・4)などの戦争小説群、党活動時代の昂揚や失望を描いた「少女」(昭22・9)「地下室から」(昭23・5)などの政治小説群、デカダン時代の苦悩を表白した「野狐」(昭24・5)「離魂」(昭24・8)ほか数多くの愛欲小説群、の五つに分類できる。

敗戦翌年の昭和二十一年三月、英光は「第二次世界大戦の見透しを正しくなし得た共産主義の美しさに再び心ひかれ」(「地下室から」第1章)、入党。沼津地区委員長となり食糧危機突破対策・隠匿物資摘発などに活躍した。九・一五国鉄ゼネストの際にも、沼津機関区に入り支援に励むが、マッカーサー総司令部の中止命令により挫折。活動に行き詰まりを感じるとともに、利己的な党員の意識の低さに幻滅する。そして、新日本文学会で中野重治と交わした、政治と文学をめぐる論争に敗北感を持ったことなどから急速に情熱を失い、「主義は信じられるが、人間は信じられない」(「風はいつ

も吹いている」昭和23・2)として、昭和二十二年四月、正式に離党する。「全てか、然らずんば無か、私のこうした極端な気持が一度、共產党と喧嘩すると、今度は淫売婦のふところに飛びこませた」(「野狐」)。英光は、十月下旬に新宿で知り合った女性山崎敬子にのめり込んでいく。「初めて、肉体の恋を知らされた」(同) 欲びにひたるが、それは同時に家庭の崩壊を意味していた。そして、この板挟みの苦悩から酒とアドルムに手を出し、破滅の道を進んでいく。<sup>①</sup>

二一

ここに紹介するのは、離党後の英光が山崎敬子と出会った頃、つまり党活動時代からデカダン時代への移行期に当たる時期の書簡類である。

【A】昭和二十二年十一月八日(十一月九日消印)

伊豆三津一〇 田中英光より 東京都京橋区銀座西一ノ三  
実業之日本社 新女苑 神山裕一宛(葉書)

啓上、また、磐田にいきましたが、お留守でした。十一月の初めにかえり、三日までおられて、こんどは関西に出張されたそうです。おかえりは十五日の予定とか、十六日にお伺いするよう約束してきました。

離党後の田中英光

それでも新年号には間に合いませんが、とにかく廿五日頃までに、原稿は書いてお送りします。旅費を本当に、どうも度々済みませんでした。こんどこそ、自分の金でいつてきますから、ケッコオです。  
草々。

【B】昭和二十二年十一月八日(十一月八日消印)

静岡県磐田郡磐田町中泉御殿青山土内より 伊豆三津一〇  
田中英光宛(葉書)

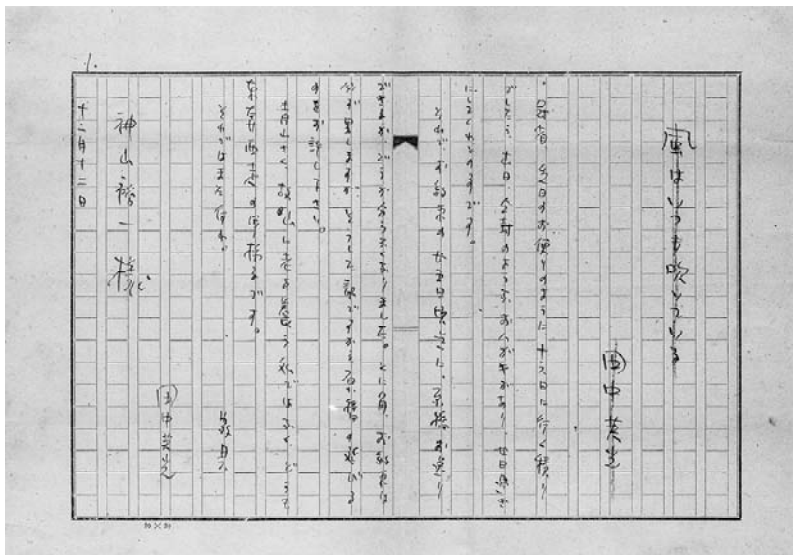
お葉書拝見いたしました。十五・六日頃おいで下さるとの事でございますが、十四日に東京に委員会があり、それに上京いたさねばなりません、又只今は関西に出張中でございますので、それらの用をすましてしまひませんとお目にかゝれないと存じます。多分二十日後になると存じますが、父の都合をもたづねいづれ改めて御挨拶申し上げます。  
一筆お知らせ申し上げます。

十一月八日

かしこ

【C】昭和二十二年十一月九日(十一月十日消印)

伊豆三津一〇 田中英光より 東京都京橋区銀座西一ノ三



【D】神山裕一宛田中英光書簡

実業之日本社「新女苑」神山裕一宛（葉書）

十月八日付の速達を珍らしく、本九日に頂きました。昨日おハガキした処ですが、二度目の訪問もお留守でした。こんどは関西出張なのです。十六日にゆくことにきめて参りました。原稿は廿五日頃迄にお送り致します。なほ、お金は三千八百円とございますが、はじめ二千五百円、あと八百円で、三千三百円の勘定になります。あと五百円送って頂く考えはなく、たゞ思い違いしていらつしやるようなので、そのみお知らせ致します。

草々不二

【D】昭和二十二年十一月十二日（十一月十二日消印）

静岡県伊豆三津一〇 田中英光より 東京都京橋区銀座西

一ノ三実業之日本社「新女苑」神山裕一宛（封書）

冠省、先日のお便りのように、十六日に行く積りでしたが、本日、全封のようなおハガキがあり、廿日過ぎにしてくれとの事です。

それで、お約束の廿五日頃迄に、原稿お送りできるか、どう分らなくなりました。とに角、お約束は必ず果しますが、そうした訳ですから、原稿の延びるのをお許し下さい。

青山さん、故山に老を養う処ではなく、どうも東奔西走の御

様子です。

それではまた何れ。

敬具

田中英光

神山裕一様

十一月十二日

【A】【C】【D】は、田中英光から実業之日本社の神山裕一に宛てた葉書や書簡である。一方、【B】は青山士（子息の代筆カ）から田中英光に宛てた葉書だが、おそらく【D】の書簡に同封されて英光から神山に回送されたものと思われる。

受信者・神山裕一は『文芸年鑑 昭和二十五年度版』『文化人名簿』に記載された歌人で、「明治四二年四月一日埼玉生、早大国文科卒、実業之日本社取締役、日本歌人クラブ会員、東京歌話会員、香蘭同人<sup>②</sup>」であった。英光と同じく早稲田大学卒業で、四歳年長。

昭和二十二年の段階では、実業之日本社発行の婦人雑誌「新女苑」の編集に携わっていた。「新女苑」は昭和十二年一月に創刊、昭和三十四年七月まで二七一冊発行された。<sup>③</sup>

一連の葉書・書簡から窺えるのは、原稿の注文を受けてその取材に奔走する英光の姿である。静岡県磐田郡磐田町に住む青山士という人物に面会を求めて何回か足を運ぶが、不在つづきで会えず、原

稿の締切日が近づいてくる焦燥感が読み取れる。また、共産党沼津地区委員長を辞した英光は、この頃、家族の待つ伊豆三津浜に戻っていたことが手紙に記された住所から確認できる。

【A】の葉書には、昭和二十二年十一月初旬、実業之日本社から受け取った旅費を使い、青山宅へ二回目の訪問を試みるが留守、家人に十六日に再々訪する旨を伝えてきたことが記されている。取材費を無駄にしたことを気に病んだ英光が、「こんどこそ、自分の金でいつてきますから、ケツコオです。」と遠慮しているのには微笑まされる。また、十六日に再々訪を済ませた後、「とにかく廿五日頃までに、原稿は書いてお送りします」、つまり十日程度で作品を書き上げるつもりだ、と記していることから、平生の英光の速筆ぶりが窺える。この葉書は九日に投函された事実が消印から判明するが、同じ日、英光は入れ違いに神山裕一から原稿を督促する速達を受け取った。

その返信に当たる【C】の葉書には、「二度目の訪問もお留守でした。」「十六日にゆくことにきめて参りました。」「原稿は廿五日頃迄にお送り致します。」と、繰り返し返されている。取材費の金額が「三千三百円の勘定」だったことも記され、英光は神山の速達に「三千八百円」と誤記されていたことに對し訂正を求めている。当時、伊東―静岡間の国鉄運賃が九円五十銭<sup>④</sup>。三千三百円の旅費は高

額といえよう。伊豆と磐田はさほど遠い距離ではない。それだけに、「新女苑」からの注文中に英光は力を入れていたはずである。

さて、青山宅再々訪を目論んだ英光だが、時を置かず、青山から発信された謝絶葉書【B】に接する。「十四日に東京に委員会があり」上京するので、二十日過ぎまで会えないとのこと。これではいくら速筆を誇る英光でも、二十五日頃までに原稿を書き上げることはおおほつかない。英光は十二日に、右の青山葉書を同封した書簡【D】を神山苑に発信する。「お約束の廿五日頃迄に、原稿お送りできるか、どうか分らなくなりました。」「原稿の延びるのをお許し下さい。」

結局、注文を受けた「新女苑」新年号には間に合わなかった。同誌に英光作品が掲載されるのは、まる一年後、「初恋」〔「新女苑」第13巻第1号、昭24・1〕を待たねばならない。「初恋」は英光自身をモデルとした重道（しげみち）（英光と音が通じ、他作品にもよく登場する）十六歳の初恋を綴った小説である。人形のように美しいが奇抜な行動が目立つ秋子に翻弄され、空想の恋が現実の恋に破られる「惨めな初恋の想い出」が描かれた。「われは海の子」（昭16・5）の一部分と重なる（自伝的）な内容で、作品執筆にあたって改めて取材に行く必要はない。【A】〜【D】の葉書・書簡に見た青山への取材は、実現しなかったのだろうか。

残念ながら、青山士という人物の実像はわからない。ただ、書簡【D】は便箋ではなく四百字詰原稿用紙が使われており、その冒頭には、一旦、「風はいつも吹いている 田中英光」と記されて、抹消された跡が読み取れる。つまり、書き始めの原稿用紙を流用して書簡が記されたのである。

「風はいつも吹いている」は、党活動への愛憎の念が記された中編小説である。——新日本文学会に参加した「私」は、政治と文学の関係をめぐって意見を異にする仲井茂春や宮沢堅次から軽くあしらわれたように感じ、キャップを務める地区でも利己的な党員の意識の低さに幻滅して、書齋に引込む。人気作家の伊達収の許を訪ね文学談義に花を咲かせるが、同席した編集者には小馬鹿にされる。その淋しさから女性の身体が恋しくなって外に出て、二人の女に五千円を盗まれた。「民衆と一緒に道を歩かなければ、私はデカダンの沼に落ち、早死にするだけだ」と自覚しながらも、主義と人間とは、まるで別の生物のように思えてきた私は、すぐにでも離党したくなる。——

英光の党活動体験を著した本作には、容易に同定できるモデルが類出する。仲井茂春（中野重治）、宮沢堅次（宮本顕治）、宮沢雪子（宮本百合子）、伊達収（太宰治）、小田作之介（織田作之助）、鮎箸

整一（舟橋聖一）等々。興味をひかれる人物には、素人劇団に出たことを咎められて地方委員を辞した「故渡辺晩翠の末娘で、その頃、離婚したての、諸子という若い女性」がいる。諸子のモデルは「若山牧水師<sup>マツミ</sup>の長女、岬子さん」で、英光の「心の中の理想像ではなかったろうか。」とされている。芳賀書店版『田中英光全集』未収録作品「女子共産党員の恋」（昭24・6）では主人公に据えられ、特高のリンチや離婚を耐え、再婚後、地区の模範党员として知られるようになるまでのいきさつが描かれるなど、英光が惹かれた女性だったのだろう。掲載誌「X」には「詩人若山牧水の令嬢をモデルにした問題の事実小説！」との惹句が付されている。

実業之日本社の神山裕一から注文を受けた作品が「風はいつも吹いている」であると仮定すれば、葉書【B】の発信者青山士が記した「十四日に東京に委員会があり、それに上京いたさねばなりません」の「委員会」が共産党関係の会議だった可能性も考えられる。他のモデルのように作中に登場させることは叶わなかったが、英光の構想中に青山も入っていたのだろう。あくまでも推測に留まるが、青山は党関係の人物だったのではないか。なお、「風はいつも吹いている」は「新女苑」新年号に間に合わず、別の出版社竹井出版から発行された「文芸大学」第2巻第2号（昭23・2）の巻頭小説として、「（百二十三枚）」の力作を謳われつつ掲載された。

### 三

昭和二十二年以降に、英光が実業之日本社発行の雑誌に掲載した作品は、

「夫婦」（「文学季刊」第5号、昭22・12）

「初恋」（「新女苑」第13巻第1号、昭24・1）

「川歌」（「ホープ」第5巻第1号、昭25・1）

の三作。昭和二十二年四月二日付、田中英光宛太宰治書簡に「新潮社より、実業之日本社の倉崎氏のはうが、スムーズに行くやうな気もしますが、どうでせうか。」と、英光から依頼されたのであろう、出版社への原稿の持込みが示唆されていることから、今回、英光と実業之日本社との仲を取り持ったのが太宰治であることがわかる。昭和二十二年十一月に青山士への取材を巡って神山裕一と手紙のやりとりをしていた英光は、同じ頃、「文学季刊」に短編小説「夫婦」を寄稿していた。「新女苑」同様、「文学季刊」の編集兼発行人も神山裕一であり、緊密に連絡を取り合っていたことが推測される。

余談ながら、英光が昭和二十四年十一月三日に太宰治の墓前で自殺を遂げた後、実業之日本社の雑誌「ホープ」に「遺稿」として掲載された「川歌」（全集未収録作品）には、重道（英光）が金木の生家に疎開中の笠井（太宰）さんを訪ね、子供のように甘える姿が

描かれている。「それから三年後の夏、笠井さんは、ある女の一ひと水に死んだ。」と結ばれていることから、本作の執筆は太宰が自死を遂げた昭和二十三年六月以降に特定できる。共産党から離れてデカダン生活をつづけ、作品を量産していた英光は、原稿を持ち込んでもすぐには活字化されない状況に陥っていたのであろう。しかし、そのセンチシヨナルな自殺によって、「新潮」「群像」「にっぽん」「小説と読物」「ホープ」ほか十数誌が一斉に、「絶筆」「遺稿」「匡底秘稿」など角書を付けて掲載に踏み切ったのは皮肉である。実業之日本社発行の雑誌に限定すれば、英光を紹介したのが太宰であり、最後の掲載作品も太宰を描いた小説だったことになる。

「風はいつも吹いている」が掲載された「文芸大学」の発行元竹井出版は、戦後再刊された最初の『文芸年鑑 昭和二十四年度版』「出版社一覧」に「港区芝新橋二ノ一（銀座六四四七、七五三三）<sup>⑦</sup>」と登録されている。英光が竹井出版発行の雑誌に掲載した作品は、

「風はいつも吹いている」(「文芸大学」第2巻第2号、昭23・2)

「純情泥棒」(「いろは」第1巻第1号、昭23・7)

「人生五十年」(「日の出」第3巻第3号、昭24・3)

の三作。他に、「文芸大学」第2巻第4号(昭23・4)に「わが青春の一断面」太宰治さんのこと」(「葉書アンケート」作家の作家

観」を寄稿している。「文芸大学」は、「風はいつも吹いている」掲載号に川路柳虹や西脇順三郎の長詩も収録されているように、文芸雑誌と位置づけられるが、「純情泥棒」(全集未収録作品)掲載の創刊号巻頭に西洋女性の多色刷水着写真を載せ、「せかいのまぢけんんき世界桃源境見聞記」から始まる「いろは」、「人生五十年」(全集未収録作品)掲載号の表紙に「巻末附録 事実小説特選集」の文字が刷り込まれた「日の出」は、カストリ雑誌色が強い。

三誌とも、編集兼発行人は竹井博友。出版社名竹井出版と重なるので、同社は竹井博友が興した出版社だと考えられる。出版界での竹井博友といえば、徳間書店の事実上の創業者としての名前が思い浮かぶ。同一人物だとすれば、その経歴は次のとおりである。――

大正九年十月、栃木県黒磯町生まれ。明治大学卒業後、昭和十八年に読売新聞社社会部記者となる。昭和二十一年に退社して、アサヒ芸能新聞社を経営。同社は読売新聞社時代の同僚徳間康快が引き継ぎ、徳間書店となる。昭和二十六年には大阪読売新聞社の立ち上げに奔走し、創業後は常務取締役に就く。また、竹井産業を設立して不動産業に進出、昭和四十年には商号を地産と改称し、ビジネスホテル・チサンホテルやゴルフ場、マンション分譲ほかの事業を展開した。脱税事件で収監されるなど、波乱の人生を送り、平成十五年七月に死去した。<sup>⑧</sup>――竹井出版としての活動は、アサヒ芸能新聞社

を経営していた時期と重なる。敗戦後のカストリ雑誌全盛期にその一翼を担った人物といえよう。

この間の英光の動静をまとめよう。昭和二十二年四月、太宰治に実業之日本社を紹介された英光は、歌人にして編集者の神山裕一と関係を持つ。十一月には、「新女苑」新年号用の作品「風はいつも吹いている」を書くため、同社から支給された旅費で磐田郡の青山士を訪ねるものの不在のため会えず、取材は進まない。神山が編集する「文学季刊」十二月号に短編小説「夫婦」を掲載するが、「新女苑」昭和二十三年新年号に作品を発表することはできなかった。

結局、「風はいつも吹いている」は、翌月、竹井博友が経営する「文芸大学」二月号に掲載された。英光と竹井との接点は未詳。四月、同誌に随筆「太宰治さんのこと」とアンケート「作家の作家観」を発表。七月にはカストリ雑誌「いろは」に「純情泥棒」を寄稿するなど、新たに縁ができた竹井出版との関係を大切にした。心ならずも違約した形となった実業之日本社「新女苑」には、翌二十四年の新年号に「初恋」を寄稿。その後、同社に「川歌」を持ち込むが英光の生前には掲載されず、没後の昭和二十五年一月、「遺稿」と謳われて「ホープ」の誌面を飾った。

#### 四

前にも述べたように、英光のデカダン時代への移行は、昭和二十二年十一月頃に始まる。新宿区花園町の山崎敬子の家でも仕事をするようになり、伊豆三津浜の家庭と両立させるため、また酒やアドラムを切らさないためにも、多大の収入が必要となったのか、英光はこれまで以上に作品を量産する。管見に入った雑誌・新聞に発表された文章のうち小説に限定しても、昭和二十二年に約三十作品だったものが、翌二十三年には約六十作品と倍増。亡くなる二十四年にも四十作品あまりが発表されている。出版社への持ち込み原稿も多かつたと推測され、未発表作品が没後一斉に「遺稿」として掲載され、諸雑誌を賑わせた。

それでも、発表されずに終わった作品は残った。「お洒落狂女」はそのひとつである。没後三年四ヶ月、文芸春秋新社発行の雑誌「文学界」第7巻第3号（昭28・3）に「未発表」として掲載され、佐伯隆敏（附記）がそこに至る事情を説明している。——たしか昭和二十三年十二月のことだったと記憶している。朝八時頃、ハマ書房編集部に、どすくろくくすんだ顔をした英光が、突然私をたずねてやってきた。一万円貸してほしいという。金を渡すと、ごそごそ原稿をとりだした。断ったが、「持つていてもいらぬから



おいてゆきます」といつて、帰っていった。会ったのはこの時が最初でまた最後であった。「どうせ薬のために書いたのだろう」と考えて、発表しないつもりだったが、麻薬をのみつづけながらも書かねばならなかった彼の宿命に思い当ると、作品に対する評価はともあれ、やはり発表したあげた方がいいのではないかと思ひ直したわけである。——『文芸年鑑』にも登載されていないハマ書房の実態は不明だが、「本業の敷物会社他に、すすめられて出版もやつてきた」佐伯隆敏が経営する出版社だったようである。

「お洒落狂女」の舞台は、戦後三年目のS区楽園町。昭和二十三年、田中英光が山崎敬子と同棲していた新宿区花園町がモデルとされている。——バラック長屋の一棟に、板金工場経営の塩坂夫妻が住んでいた。商売が軌道に乗り立派な二階家まで建てるが、塩坂は自分がいちばん偉いと錯覚し、酔うと女房の絹を乱打するようになる。おとなしい大柄の女・絹は、あまりの虐待に気が触れてしまう。塩坂を打擲するなど凶暴で、手におえない。近所の家にながり込んで悪口を言い散らすのでどこからも相手にされなくなり、最後に酒乱の女性と同棲している自称小説家の家にたどり着く。絹に同情する自称小説家はしつようにさせておくが、ある日、絹に「旦那、(中略)子供が可愛くないのかい。淫亂だねえ、こんなパンパンガアルと一緒に住んでいて。」と言ひ出され、ひやりとする。結局、

絹は田舎の養父母のもとに送り返された。「けれども、その小説家と、女との間は、それから気持にひどい食違いができ、間もなく別れるようになったのである。」——

「お洒落狂女」の題意は、おとなしい時には鏡に向かつて厚化粧をし、黄色い振袖を着て道路で踊り出しもする女性に基づく。絹の発する言葉には、今日の眼から見れば引用がはばかれるような差別的表現が頻出する。これも、佐伯隆敏が、当初、雑誌に掲載することを躊躇した理由のひとつかもしれない。優れた作品とはいえないが、焼跡からの再興をめざす新宿区花園町の様子が描かれていること、敬子に対する英光の心情が反映していることなど、汲むべき内容もある。

自身を投影した「自称小説家」を「浅はかな人道主義者のセンチメンタリスト」と規定し、「小説家だと自稱していたが、長い間の無節制な生活の爲、ちゃんとした雑誌にちゃんとした小説を発表したことはなく、いつも所謂、カストリ雑誌のたぐいに、怪しげな小説を書いていた。」と韜晦するところに、デカダン時代の英光の苦悩と自己認識が示されている。昭和二十三年には、「風はいつも吹いている」のほか、「戦後革命運動の内部からその思想的・組織的類廢の根源を鋭く剔抉し、日本革命に主体的な責任をもつ前衛党的あるべき姿を追求した」<sup>⑪</sup>として評価の高い「地下室から」(昭23・



「お洒落狂女」自筆原稿26枚目

5)を書き始め、書き下ろし歴史小説『わが水滸伝』(昭23・3・20、新紀元社)や、作品集『暗黒天使と小悪魔』(昭23・10・31、新潮社)、『黒い流れ』(昭23・11・15、新潮社)を相次いで刊行するなど、「ちゃんとした小説」も発表していたにもかかわらず、韜晦せざるえないところに、英光の作家としての誠実さが窺える。

この「お洒落狂女」の自筆原稿が手元にあるので、紹介したい。四百字詰原稿用紙全三十一枚のうち、冒頭の二枚は欠。紹介できるのは二十九枚分である。ブルーブラックのインクで一字ずつ柘目にていねいに埋められており、書き急いだ感じは見受けられない。作品を量産した英光だが、文字に乱れはない。酒やアドルムを飲んで、執筆には真摯に取り組もうと意識していたのだろう。

「お洒落狂女」は英光没後に発表されたため、基本的に本文異同は無い。ただ、表記に関しては、「塩坂」↓「鹽坂」、「台辭」↓「臺辭」、「処が」↓「處が」、「狂乱」↓「狂亂」、「幼児」↓「幼兒」、「拡声器」↓「擴聲器」、「鉄工場」↓「鐵工場」、「大体」↓「大體」、「五千円」↓「五千圓」、その他、原稿段階での略字(新字体)を雑誌で正字(旧字体)に戻している例が多く見られる。早く昭和二十四年四月に当用漢字字体表が告示されていたにもかかわらず、文芸雑誌においては昭和二十八年の時点でも、作家の意識とは別に、基本的な旧字体が

用いられていたことがわかる。「きつと」「しょつちゆう」など、促音・拗音の類を原稿表記のまま残して、小さく記さないのも同様の意識に基づくのだろうか。一方、「いはれる」↓「いわれる」、「ぢやない」↓「じやない」、など、かなづかいが新しい表記に変えられているなど、移行期の表記が窺われて興味深い。

「鐘、太鼓をか、え」↓「鉦、太鼓をか、え」、「専門」↓「専門」、「而し」↓「然し」、「気ずいた」↓「気づいた」、など、英光の誤記と思われる表記は、「文学界」の編集者の手によって改められている。

おもしろいのは、八枚目の原稿用紙に二箇所、「お洒落狂女」の名前が「ちよ」と誤記されていることである。もちろん、雑誌では「絹」と訂正され、統一が図られている。また、次の九枚目では、「酔つた時の塩坂の妄想が、そのまゝ、絹に乗移つたらしい。」の一文のうち、「塩田」から「塩坂」へ、「ちよ」から「絹」への原稿段階での修正が見出せる。英光は執筆途中で、作中人物の名前の揺れに気づいて訂正した。八枚目の「ちよ」は、訂正漏れということになる。英光が誤記してしまったのは、「絹」に「塩田ちよ」という名のモデルがあり、その実名にひきずられた結果だったのかもしれない。狂気に陥った女性を実名で出すことははばかられたはずである。ここにも、自身の体験や見聞を基に作品を著すことが多くなつた、デカダン時代の英光の創作方法が垣間見られる。

英光自身の手になる原稿段階での推敲では、他にも、塩田が板金工場を作った場所を「近くの荒地」から「近くの空地」（三枚目）に、「ウイスキ」を「ウイスケ」（同）に修正するなど、細部へのこだわりがみられる。気の触れた絹が「塩坂の爲に、自分の生涯の幸福は目茶苦茶になつた」と罵り喚く場面では、当初、「自分の生涯は」とのみ記されていたものを、「自分の生涯の幸福は」（十五枚目）へ、〈幸福の崩壊〉を強調する方向に修正され、夫に対する絹の怨みが増幅されるとともに、近所の家庭の幸福を壊そうとする衝動の源とされていく。

自称小説家が絹を入院させてやりたいと考える病院の院長を、「知合いの精神病の大学のT博士」から「知合いの精神病の大家のT博士」（二十八枚目。傍点引用者）へ修正しているのも、T博士のモデルを考えるに当たって手掛かりになりそうだが、より興味深いのは、英光を投影した人物の〈自称小説家〉という呼称である。最初に自称小説家が紹介される「夫は小説家だと自称していたが、」の部分では、当初、「夫は小説家だといはれていたが、」（二十六枚目）と記されていた。ジャーナリズムに小説家として認められていたとする表現から、それを否定する表現へ。卑下を伴う〈自己劇化〉が淋しい。

「お洒落狂女」の自筆原稿を読むと、山崎敬子と同棲生活を営む

新宿花園町の家に押しかける、心を病んだ女性（塩田ちよ）を描こうとしながらも、最後には英光自身が登場し、自身を（自称小説家）と位置づけ、敬子との別離を予感するなど、昭和二十三年における英光の生活と創作のあり方が浮かび上がってくる。（狂女）と（自称小説家）、ふたつのテーマや素材がうまく結びついていない点で書き急ぎの批判は免れないが、デカダン時代の一つの指標となる作品ではある。「やはり発表したあげた方がいいのではないかと思ひ直し」た佐伯隆敏によって公開されたことを喜びたい。

英光は、「肉慾の果て―狂人の手記」（X）昭24・8。全集未収録作品）において、「自我・色欲中心の妄説」を広め満天下の子女を惑わせ墮落させている「肉体文学の大家」として、船田泰一こと田村泰次郎を激しく批判している。英光が常にライバル視していた田村泰次郎は英光没後も健在で、「お洒落狂女」が掲載された「文学界」第7巻第3号のアンケートに「沖繩へ行きたい。（中略）同時に、沖繩の日本復帰運動に協力したい。」「巴里の門」を書きつづけること。」などと答え、「文学界告知板」コーナーでは「フランス旅行から帰って田村泰次郎氏の絵画熱は一層たかまつた。」と動静が伝えられるなど、活発な行動をつづけている。カストリ雑誌に数多くの作品を発表した作家の双璧ともいえる、田中英光と田村泰

次郎。実業之日本社から支給された旅費に気を使いながら作品取材をつづけたり、自身を（自称小説家）と韜晦したり、田中英光には豪快な田村泰次郎と対照的な印象がある。その誠実さが英光を自死に導いた可能性は高く、早世が惜しまれる。

#### 注

- ① 田中英光の作家活動と生涯の素描は、拙稿「田中英光―虚構の敗北に殉じた死」（山崎国紀編『自殺者の近代文学』所収、一六三頁～一八二頁、昭61・12・5、世界思想社）に基づいた。
- ② 日本文芸家協会編『文芸年鑑 昭和二十五年版』「文化人名簿」二〇六頁（昭25・6・15、新潮社）
- ③ 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第五卷「新女苑」の項（橋詰静子執筆）、一九六頁（昭52・11・18、講談社）
- ④ 日本交通公社編『主要駅時刻表』第23巻第6号（昭22・6、日本交通公社）
- ⑤ 銘康雄「若山牧水令嬢と英光のことなど」（「さえら」昭38・冬。『田中英光全集』第五巻所収、三八五頁～三八八頁、昭39・12・20、芳賀書店）
- ⑥ 『大幸治全集』第十二巻「書簡」四二一頁～四二二頁（平11・4・25、筑摩書房）
- ⑦ 日本文芸家協会編『文芸年鑑 昭和二十四年度版』「出版社一覽」一一八頁（昭24・9・15、新潮社）
- ⑧ 竹井博友の著書『執念』（昭46・10・25、大自然出版局）、『葉隠』を読む』（昭58・3・14、P H P 研究所）、および、共同通信4NEWS

「竹井博友氏死去 元地産会長」2003/08/04. Wikipedia. ほかの情報を集めてまとめた。

⑨ 拙稿「田中英光著作目録（新聞・雑誌の部）」（越前谷宏・島田昭男・田中勳儀・塚越和夫・橋詰静子・矢島道弘編『田中英光事典』所収、近刊、三弥井書店）に基づいた。

⑩ 佐伯隆敏「お洒落狂女（附記）」（『文学界』第7巻第3号、昭28・3）  
⑪ 島田昭男「無頼派文学評価の問題」（『昭和作家論』所収、一五八頁、昭52・10・11、審美社）

〔付記〕 本稿で引用した田中英光の文章は、『田中英光全集』全十一巻（昭39・12・20、昭40・12・20、芳賀書店）を底本とする。引用に際しては、ルビを簡略化し、漢字は原則として新漢字に改めた。ただし、表記のあり方に言及した「お洒落狂女」については、自筆原稿および初出誌を底本として、表記もそのままとした。